

ピアノのお稽古(3)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

ドイツには **Akademie für Musikpädagogik** (アカデミー) と称する音楽教育の研究団体がマインツにあり、そこが SCHOTT 社から出版している音楽の教科書や新しいタイプの授業が最先端です。私がドイツを訪れたのはベルリンの壁が取り壊されている 1990 年でした。ジーゲン (Siegen) という人口 12 万人弱のその町の小学校の校長であり、アカデミー指導員で音楽専科の Wehn 先生の授業を見学するのがその町を訪れた目的でした。

というのもドイツには州ごとに文部省のようなものがあり、教育システムは州ごとにわずかに異なります。例えば 3 年ほど前からやっとドイツも土日が学校休日となりましたが、実施可能な州から先行実施が可能でしたし、夏休みは州ごとに毎年ローテーションしながら 6 ~ 9 月の間に 1 週間づつずらして実施されます。ですから 8 月に新学期が始まっている州もあれば、9 月から夏休みの所もあるのです。(日本のように夏休みはある時期に企業も学校も集中するところでは観光地もその時だけの高額料金を設定するため庶民は長期休暇を消化するだけの余裕も財力もありません。)

このアカデミーは 1980 年代を音楽教育混乱の時期と位置づけ、様々な改革を実施してきました。その最も大きなものはキーボードの導入でした。ドイツといえばリコーダーの本場のように思われがちですが、実は着実に鍵盤楽器に移行してしまっているのです(それも電子キーボード)。

さて、町はずれにある小高い丘の上の小学校では 4 年生の授業が始まっていました。長細い教室の中ではコの字に向かい合った 20 名程の児童が普通の教室机の上にポーターンを載せていました。黒板には

```
| C C C . | C C C . | H H H . | . . . . |
| H H H . | H H H . | C C C . | . . . . |
| A A A . | G G G . | A A A . | G G G . |
| A A A . | A A A . | . . . . | . . . . |
| C C C . | C C C . | H H H . | . . . . | ~
```

と書かれてあり、C = 5 H = 4 などの指数が色を変えて添付してありました。

この授業では 2, 3, 4, 5 の指を使った運指の練習をしていたのです。日本では鍵盤楽器を使った授業では指使いはあまり厳しく指導しませんがこのシステムでは厳密に指導しているようでした。

この授業では最初にこの歌を耳から聴きます。即ち



"Hören" (聞く) です。もちろん楽譜はありません。次はそれを歌います。即ち "Singen" です。ここまでは前の時間に済ませていたようで、その日は "Spielen" 即ち演奏する日でした。先ほどの黒板に書かれた C とか H 等の指定された場所以外はお休みです。

上の楽譜では上向きの棒の音符だけを指します。先生の伴奏はポータートーンのオート・コード (オートリズム?) で自動的に無人演奏されています。後は Wehn 先生が黒板の C とか H を指さした時だけそのキーを弾けばよいのです。楽譜の下向き棒のパートは歌ですから先生が大声で歌います。"Wir singen C,C,C. Wir singen C,C,C. " というような感じの歌詞だったと思います (私も楽譜は見たことがないので確かではありません)。

結果は . . . 。残念ながら無秩序無政府状態に陥り、いつも誰かが C C C あるいは H H H というような状態でした。しかもドイツの学校では日本のように「大きな声で」歌う習慣がありませんから盛り上がらないことこの上ない授業だったのを覚えています。この先生、出張授業で 100 キロも離れた所の中学校でも授業をしましたが、結果は同じでした。しかし、素晴らしいのは歌うときは「ドレミ」だったのに、鍵盤の時は「C H A」を用い一度も「ドレミ」で教えなかったことで、これは他の学校の先生でも同じでした。はじめて鍵盤を触るときに「ここがド」というのがいけないんだと痛感しました。(そうそう結局授業の大混乱はハイテクの応用で、元電源オフで解決していましたっけ)